

消費者との距離縮める

「農業生産法人」は全国で増加傾向にあり、二〇〇七年現在約九千五百ある。県内でも生産だけでなく直接販売や観光農園など、食の安心を求める消費者との距離を縮めた取り組みで注目を集める法人が増えている。意欲的な経営が地域の永続的な営農や人材育成、活性化に及ぼす影響は大きく、消費者にとっても目が離せない存在になっている。

(峰松清子)

食考

「自家製堆肥で飼料のトウモロコシを栽培し、飲用水にもこだわり生産した牛乳」プロとして、

「一番おいしい搾りたての牛乳を、みなさんに安心して飲んでもらいたかった」と「山田牧場」(西原村)の山田正晴社長(五十八)は、同牧場は、新鮮な牛乳で作ったソフトクリームを味わい、ポニーやヤギと触れ合う家族連れのにぎわう。

山田さんは一九七二年、成牛十五頭で酪農経営をスタート。四年後に四十頭、九三年には百頭に増やし、搾乳やふん尿排出作業を合理化できる設備を導入して生産性を上げ、法人化に踏み切った。

「自家製堆肥で飼料のトウモロコシを栽培し、飲用水にもこだわり生産した牛乳」プロとして、



農業高校生の研修や子どもの体験学習も積極的に受け入れる山田牧場の山田社長(右)。「学んだことは、就農しなくても社会で役に立つはずです」

注目集める 農業生産法人

食の力

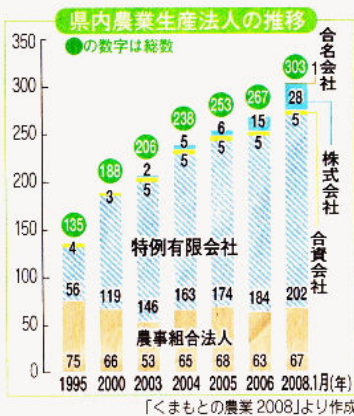
呼び掛け、現在は自家飼料を共同で賄う。「農家が一人で頑張れる時代じゃない。高齢化や後継者不足など悩みも多いが、地域全部で知恵を出し合えば、消費者に支持される良い物ができる」

後継者や人材育成に力を入れる法人も増えてきた。産みだす卵の販売と観光農園で年間約四十七万人を呼び込む「コココファーム」(菊池市、松岡義博社長)は二〇〇一年、農業を学ぶ「実農学園」を設立。現在は一年間の雇用研修と、「我発見塾」と称し就業検討者向けの研修を開く。「ま

農園(益城町)や、生産管理の世界基準を取り入れた青シソを米国や香港に輸出する青紫蘇農場(合志市)など、県内に意欲的な法人がたくさ

「情報を仕入れ、人材を育て、ほかの農家と協力し合い農業を持続させていく。そうすることで地域と食を守るのが大切な責務だと思っています」

二月1回掲載



食農リーダー

金丸弘美の

国が農家の法人化を推進していることもあり、最近はその地でも法人経営が増えている。北海道の大型農場のようにスケールを生かした例もあるが、小さくとも農業に企業経営的視点を入れ、新しい形で展開するところも少なくない。法人化で、さまざまな補助金や行政支援も受けやすくなり、これまでとは違った形の農業が生まれているのである。

その一例として紹介したいのが、長崎県大村市にある「有限会社夢ファームシユシユ」だ。地域農家と連携した直売所と観光農園、それにレスト

企業の視点で新展開

ラン、パン工房、体験教室などを組み合わせ、町全体の底上げにつながっている。「シユシユ」が誕生したのは二〇〇〇年。この地域は、もととアドウやナシの観光農園で知られたところだが、各地に観光農園が増えて集客が落ちていた。高齢化で後継ぎがないという問題も顕在化し、対策を練るために地域の農家が集ったのが始まりだ。

最初、「やれるところから始めよう」と有志四人がビニールハウスを使って農産物の直売所を始めた。次に、余った果物を活用した四季折々のジェラートを売り出した。これが若者の人気を集め、年間十七万人が買いに来るようになった。

そこで農家八戸が法人組織(食環境シャナリスト)を立ち上げた。それがシユシユである。ログハウスの雰囲気に合わせて、近所の農家百戸が、出荷する農産物直売所を備えた施設を造り上げた。さらにパンやジャム、イチゴ大福作りなどの体験教室を開き、子どもからお年寄りまで楽しめる場となった。教室は修学旅行の誘致にもつながった。

周辺の観光農園を紹介する取り組みもしている。地元ケーブルテレビ局の協力で各農園を紹介する映像を作り、モニター画面を設置して放映。来店者のために地図も用意した。これが人気につながり、町全体に年間四十万人を呼び寄せている。(食環境シャナリスト)